

SER no.026; はしがき

著者	中牧 弘允
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	26
ページ	1-2
発行年	2002-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10502/1412

は し が き

中 牧 弘 允

国立民族学博物館先端民族学研究部

国立民族学博物館では全米日系人博物館の巡回展「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人」が2001年4月19日(木)から8月28日(火)まで本館正面ホールで開催された。これは国立民族学博物館(以下、民博と略す)にとっては最初の巡回展の受け入れであった。民博では1977年の開館以来、20年以上、自前の展示しかしてこなかったのである。では、なぜ民博がこの巡回展を引き受け、積極的に取り組んだのかといえ、多文化主義の展示内容が民博にふさわしいことに加え、評判の高いアメリカ流の学習プログラムとボランティア活動を組み込んだ展示を実際に経験したかったからにほかならない。そのことによって従来型の展示では得がたい知識とノウハウを実践的に体得することが期待されたからである。そして、すくなくとも民博側にとっては予想以上の収穫をあげる結果となった。

本書はその巡回展にかかわる試行錯誤に満ちた実践の記録であり、その総括でもある。たんなる記録に終わらせないために、さまざまな角度からの理論的考察も加えている。

「弁当からミックスプレートへ」(以下、「弁当展」と略す)という個別の展示をあつかってはいるが、それは学習プログラムとボランティア活動を展開するうえでの素材として位置づけられ、そこからより一般的な論理を組み立てることが志向されているのである。

執筆者はすべて「弁当展」にかかわったが、関与のしかたはそれぞれに異なっていた。筆者は実行委員長として「弁当展」全体の運営に責任をもったが、学習プログラムとボランティア活動には実践主体として参与することはすくなくあった。中心となったのは、民博側のスタッフとしては研究支援推進員の吉荒佳枝、青柳千子、安田純子、ならびにCOE研究員の佐藤優香の諸氏である。全米日系人博物館側では三木美裕教育部長が準備段階から節目節目に来日し、点検と指導にあたった。また、中央大学の森茂岳雄教授と東京学芸大学附属世田谷小学校の中山京子教諭は、「弁当展」の実行委員として、主に学校向けの学習プログラムの作成と実践にあたった。展示学研究所の橋本知子研究員はユーザー側の視点から見た学習プログラムの評価にたずさわった。こうした面々がそれぞれの立場から学習プログラムとボランティア活動をふりかえり、批判的に総括したのが本書である。

「弁当展」は民博と全米日系人博物館の共催で企画された。タイトルで「日米共催の展示会」とうたっているのはそのためである。そもそも「弁当展」はアメリカで計画され、1997年のピショップ博物館(オアフ島ホノルル)を皮きりに、ロサンジェルス、全米日系人博物館、カワイ島の戦争記念コンベンション・センター、ワシントンのスミソニアン博物館、さらにハワイ島のライマン博物館での開催を終え、日本に巡回されることになった。しかし、その際、日本向けにあらたに展示品の選択、ならびに展示モジュールや解説パネルの新規制作がおこなわれ、2000年11月10日から12月10日を会

期とする沖縄県立博物館での開催となった。それにあわせ、三木氏は教育キットをあたらしく開発し、ボランティアを募集して、その使用をこころみた。森茂・中山両氏も全米日系人博物館の英語版学習プログラムを参考としながらも、日本の学校向けに独自の学習プログラムをつくりあげ、現地校で実践した。そうした沖縄での経験をふまえ、民博では研究支援推進員やボランティア・スタッフとともに、さらなる改良や追加をこころみた。このような意味で学習プログラムにおいては文字どおり「日米共同開発」がくわだてられたといっても過言ではない。ただし、佐藤氏による夏休みの「ミックスプレートひろば」は単独の企画で、直接的には「日米共同開発」のプログラムとは言いがたいところがある。しかし、「弁当展」のアイデアを食文化に敷衍したもので、関連企画として位置づけられていたことは言うまでもない。

ちなみに、「弁当展」実行委員会の構成メンバーは以下のとおりであった（役職は当時）。

実行委員長	中牧 弘允	国立民族学博物館教授
実行委員	小長谷有紀	国立民族学博物館助教授
	林 勲男	国立民族学博物館助教授
	笹原 亮二	国立民族学博物館助手
	三木 美裕	全米日系人博物館教育部長
	新垣 誠	沖縄キリスト教短期大学
	森茂 岳雄	中央大学文学部教授
	中山 京子	東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校教諭
	大島 英夫	国立民族学博物館管理部会計課長
	隅田 雅夫	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課長

このように民博にとって初の経験となった外部展示の受け入れは、ただ単にすすんだ学習プログラムやボランティア活動を学ぶだけでなく、「共同開発」によって多少とも新芽をだすことができたようにおもわれる。それを可能にいただいた実行委員、情報企画課、研究支援推進員、ボランティア・スタッフをはじめとする関係各位にこの場を借りてお礼を申しあげたい。とりわけ支援と協力を惜しまなかった全米日系人博物館のジョージ・タケイ理事長とアイリーン・ヒラノ館長、ならびに三木美裕教育部長には深甚なる謝意を表するものである。また石毛直道館長、栗田靖之教授（博物館運営委員会担当部長）をはじめとする研究部、情報管理施設、管理部からの支援も心強いものがあった。

最後に、本書の編集にあたっては河田尚子さんと山城寿賀子さんの協力をえた。あわせて感謝の意を申し述べたい。

2001年12月

中 牧 弘 允
「弁当からミックスプレートへ」展実行委員長